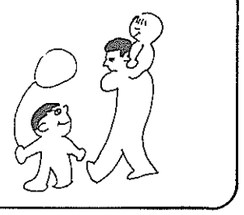
市民のひろば



民謡教室へどうぞ

本年一月十二日より毎週水曜日、午後七時より九時まで、山崎星華先生のご指導により、中央公民館において民謡教室をはじめました。

民謡の定義は皆様ご承知のように、民衆から出た唄、民衆の中に生き民衆の中に根ざす唄、その本来の情質が民衆的な唄であることとされているように、民謡は民衆の生活の中で生れ育った唄であり民族のもっとも直接的で根源的な要素を表現するものとして文学、民俗学、音楽上の貴重な宝であります。

歌詩は素朴な民衆の生活のための歌であり、祭事や踊歌であり仕事歌であります。

このように民衆の中に自然発生し長い歴史をもった楽しい歌を、発声、発音、タクトと基本的な声楽の勉強をしながら、多忙な毎日の中に心の安らぎを求め楽しく唄いながら民謡の勉強をしてみませんか。

唄いながら働くことのできる人生とは本当に素晴らしいことではないでしょうか。

誰でも自由に参加できます。参加を希望される方は、**中央公民館**までどうぞ。☎④3498

お問い合わせは、大埔乙一二三五島村辰彦へ。☎④2094

大埔　**島村辰彦**

修学資金等の貸付制度

母子家庭の児童を対象とした修学資金等の貸付制度があります。

高校（高専）に進学する児童、大学に進学する児童、知識技能を習得させる施設に入所する児童、就職する児童に貸付けられるもので、修学資金、就学支度資金、就職支度資金の制度があります。

これは無利子で、償還は卒業後本人がすることになっています。

なお、他の制度による貸付けと重複して受けることはできません、詳しいことは担当までどうぞ。

【福祉事務所社会係】

南国あひる会が発足

市スポーツ教室が発展解消して一月より〝南国あひる会〟が発足しました。会名は、白鳥になれなくったっていい、その短かい足でチョコチョコと動き、ありったけの声でガアガアわめき、愉快に陽気に気軽に自分たちのできる範囲内で活動し歩んでいこう、というところからあひる会と名づけました。

会員は現在十三名。年令も花の二十二歳から天下の六十五歳のおじいさままで様々です。ほとんどの人が三十代、四十代の主婦業で大急ぎでだんな様や子供たちの食事の世話をすませ、駆けつけますのは毎週土曜日夜七時半。市民体育館で、気持ち良く笑って、汗をかいて、九時まで卓球、バレーボール、柔軟体操などの運動をします。みんな、苦手なものでも一生懸命なのです。

こんな私たちと一緒にスポーツをしてみませんか。老若男女を問いません。連絡は、市民体育館までどうぞ。入会金千円、会費は月額五百円、障害保険費が年額三百円いります。

会長・三宮正子、**副会長**・勝間田初恵、中沢道子、**顧問**・竹島寅吉、末政克紀、**顧問医**・柴田医師、**指導**・門田尚士、沢田一彦（市民体育館）

訂正

広報なんこく一月十日号十五ページの南国俳壇で〝ビーマン半値空が青い　岡崎美枝（忍冬句会）〟とありますのは、〝**菊半値ビーマン半値空が青い　岡崎美枝**（忍冬句会）〟です。

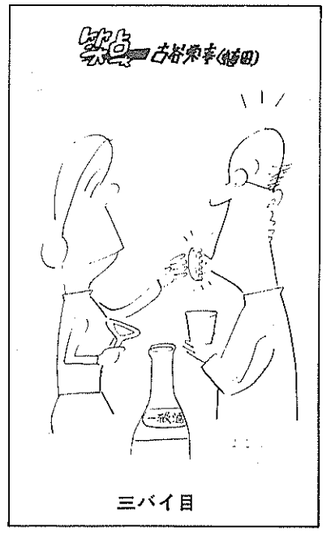
おわびして、訂正します。

広報なんこくの発行について

広報なんこくは、毎月一日と十五日に発行していますが、一月に限って十日に発行（一回のみ）しています。

市民のみなさんから発行についてのお問い合わせがあっておりますが、その点を十分ご了承ください。なお、連絡員の変更とか、部数の増減がありましたら、管理課庶務文書係まへ連絡してください。

また、広報の原稿締切りは発行日より二十日前となっています。市内の明るい話題、楽しい話題を広報委員会までお寄せください。



三バイ目

南国俳壇

大谷　美寿（波俳句会）

没丁の蕾ふくみて植え替へし
灯火のひとつふえたる枯野かな
浪除けに布団を干せる女房かな
蓑虫の置き忘れたる蓑一つ
逃亡者ならず枯野をひた急ぐ
葱太り過ぎて空港狭くなる
門川の流れに添ひし草紅葉
霜光る鴟尾真向ひに明けの鐘
一服をおえ立ち上がる頭かぶり

岡崎　笳林（〃）
竹島いはほ（〃）
和田ひでみ（岩村句会）
北岡　高子（〃）
西川　洋水（〃）
林　広裕（梵鐘会）
高橋　蛙（〃）
竹内　隆造（〃）

南国歌壇

元朝の宮に夫打つ初太鼓
こだます森に氏子ら集う
　亀岩　島本　栄

幼な子の笑いさざめく声ききて
眠ざめし今朝の初日の出彩か
　立田　北村幸江

日の出美に勝り輝く我が心
フルに生かさん薄日の身として
　立田　清岡照子

土佐路ぬの丘越へわたる音もなき
むつきの雨がいのち育くむ
　大埔　中田憲秀

四合の飯

奈路から黒滝に通じる林道をのぼり遠郷にはいると道の少しさがったところに、四合渕という小さい渕がある。今はすっかり浅くなり名ばかりの渕になっているが昔は背々と澄んで大蛇がいるではないかと思われる深い渕であった。

そのそばに四合屋敷という地名があるが、昔その屋敷に古風な一軒の農家があり一人息子がすっかり成長したので、近郷からこの家にふさわしい嫁をむかえ、平和で楽しい日々がつづいた。この家の家風として、毎日四合の飯しかたくことが出来ないならわしになっていた。嫁は家風をまもり、我が家だいじに働いたが、一日家に祭りごとがあり、大勢の客が集った。この人々をもてなすには到底四合の飯では足りるわけがない。困りはてた嫁は、誰にも相談せずに五合の飯をたいて客をもてなした。

ところが、その日から後は四合の飯をたくと、どうしたことか家族のものは腹がはらないと訴える。五合にふやしてもいかない。六合、七合といくらふやしても、どうしてもたりないのである。

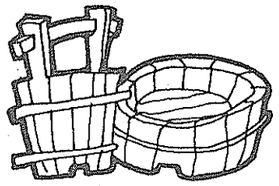
嫁は考えた。家風をやぶり四合以上の飯をたいて客をもてなしたにちがいない。家風を破ったのがわるかった。こう思うと自分の責任の恐ろしさにおびえおののくのであった。思いあまったあげくのはては、とうとう発狂し、ご飯をたいた釜をかぶって、そばの渕に身を投じた。これからこの渕を四合渕とよぶようになったという。

渕のすぐそばに釜床というところがあり、ここに豊滝神社が祀られている。祭神は不詳であるが一説には海津見神を祀ってあるともいう。

ところがその後、この嫁の怨霊のしわざか、この神社を中心に、不思議な事変が次々におこるようになった。あるときには山の崩れるような大音響がしたので何事かと思って村人たちが行ってみたが別に何の異変もなかったという。しかしその後もたびたび、大音響がうと大きな白蛇が、とぐろを巻き目をひからせてにらんでいたが、これはきっと嫁の化身だと、まこしやかにいう人もある。

また或る人はこの神社のそばで大きな白蛇を見たともいう。

またある人は本殿の中をうかを開いたという人があらわれた



ご家族で話し合って答えてください。答えは今月号の広報に出ています。

■**もんだい**・新春恒例の○○○○が行われ、市長らが後免の町へかけ出し、日吉神社で参拝しました。

■**しめきり**・二月十五日（水）

■**おくり先**・〒783　南国市大埔甲2301　南国市役所広報委員会　親子クイズ係

■答えのハガキには心ずお歳・職業を書いてください。

■**しょうひん**・特賞（千円）＝三人、残念賞（記念品）＝十人

第七十六回正解者発表

■**こたえ**・㊐㊏月㊐㊏日でした。

■**特賞**・千円＝三人

野村友代さん　（東崎）
金子一二三さん（立田）
杉本　守くん　（大埔）

■**残念賞**・記念品＝十人

島崎学（稲生）門脇佐和子（久礼田）徳橋尚子（植野）谷美智代（岡豊町小篭）黒木秀子（東崎）富橋伸輔（植野）隅田幸子（後免栄町）尾原美枝子（立田）橋田信行（小埋）水田勝久（久礼田）

どしどしご応募ください。